

[教育実践報告]

1 年次の基礎看護実習における ICE モデル を用いたルーブリックの検討

岩 村 純 子 井 上 加奈子 岩 瀬 裕 子
徳 永 郁 子 荒 尾 博 美

Examination of rubrics using ICE model in 1st year basic nursing practice

Junko IWAMURA, Kanako INOUE, Hiroko IWASE
Ikuko TOKUNAGA, Hiromi ARAO

【和文抄録】

本研究の目的は、ICE モデルを用いて、実習目標達成度を学生と教員が共有できるルーブリックを作成することである。

ルーブリック作成過程として、まず生活者としての対象理解に焦点をあて、単位を修得した学生3名の実習記録内容を従来の評価表を用いて、複数の教員で評価を行った。次に事例検討会で評価結果の共有と意見交換を行った。事例検討会では、これまでの5段階評価における教員間の評価の差、その背景にある評価基準の捉え方の違いが明らかとなった。現状を踏まえ、改めて基礎看護実習Ⅰの到達目標の設定を行った。また評価の根拠となる要素を抽出した。これをもとに、I (Ideas)・C (Connections)・E (Extensions) の枠組みの内容を検討し、ルーブリック案を作成した。そして、教員1名あたり数名の学生に対して従来の評価基準による評価および作成したルーブリックによる評価を行った。ルーブリック試行後の意見から、目標や学習プロセスを学生と共有できることへの期待、さらに表現の検討など課題も明らかとなった。

キーワード：ICE モデル, ルーブリック, 実習評価, 評価基準, 学習成果

I. 緒言

2012年に中央教育審議会¹⁾が『新たな未来を築くための大学教育の質的変換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』と題し、答申を出して以降、各大学で教育改革が進み、アクティブ・ラーニングの実践、また学修成果の把握としてルーブリックの活用が広がっている。看護基礎教育においては小宮山ら²⁾がルーブリックに関する文献検討にて、2016年度以降原著論文が急増していること、またルーブリックの導入準備・初回導入・

継続活用段階の研究が同時並行的に進められており今後も増えていくことが予測されると述べている。ルーブリックについて、森田³⁾は評価上の利点として、客観的で一貫性のある評価、評価基準の明示、簡便かつ短時間での評価、即時的フィードバック、詳細なフィードバックが可能であると述べ、さらに使用上の利点として、授業改善、コミュニケーションの活性化、批判的思考の習得を挙げている。

一方で、土持⁴⁾は、日本ではルーブリックが評価目的だけに使用されている傾向があると指摘する。また杵磨⁵⁾も従来から用いられてきたルーブリック

は量的なものも多く、学びの質的転換が促されているとは言い難いと述べ、ルーブリックが教員のための評価ツールであり、学生の成長支援ツールとしては不十分であったことを指摘する。そのため柞磨⁶⁾はさらに、学びの先に見るものを見据えた、学生の成長を促すためのフレームワークが必要であると述べ、Ideas（基本的知識）・Connections（つながり）・Extensions（知の応用）の3つのフェーズからなる「ICE」モデルを紹介している。教員はこのモデルを用いて、学生に基本的知識の間のつながりを適切な質問や指導により理解させ、さらに学生自らの体験に結びつけた知の応用へ発展させるのである⁷⁾。ICEモデルの特長として、学生・教員で共有できること、学生自身が学びのプロセスを把握できること、表現される内容が質的であること、Connectionsにおいて知識の統合が促されること、Extensionsにおいて学びの質的飛躍が期待できること⁸⁾が挙げられる。さらにICEモデルでは、「できないこと」よりも「できること」に視点が置かれ、肯定的な表現が用いられることも特長といえる。他の評価方法との相違点として、ICEの枠組みはそこで評価されている学びの特徴を詳しく述べる「表現する」のに役立つ⁹⁾という。

A大学の基礎看護実習Ⅰとは、1年次後期に開講される看護学生にとって初めての臨地実習である。実習展開は4日間の臨地実習と1日の学内実習で構成され、臨地では看護師とともに受け持ち患者を中心に看護活動に参加する。基礎看護実習Ⅰの目標の一つには、「看護の対象となる人の生活の場や生活の仕方について説明することができる」がある。看護職の役割は生活を整えることであり、この実習で生活者としての対象理解が、健康に何らかの障害をもつ人への看護の展開においても欠かせない能力であると捉えている。これまで基礎看護実習Ⅰでは、実習評価に『大変よくできた』『できた』『少しはできた』などの5段階評価を用いていた。しかし目標である「看護の対象となる人の生活の場や生活の仕方について説明することができる」について、評価対象となる課題の質の部分をもどのように評価するか不明瞭であり、学習成果を適切に評価するには従来の評価方法では不十分であると思われる。また実習指導には多様な背景をもつ実習指導教員が複数で関わるため、指導においても、また評価の根拠においても教員個々の価値観が大きく影響している可能性

があり、公平性や妥当性が保たれているのか疑問であった。さらにこれまで最終評価の詳細なフィードバックは実施しておらず、学生の今後の課題については自己評価による認識に留まっていることも課題と考えられた。そこで学生の実習目標達成度を適切に評価するために、具体的な実習目標達成状況を設定することが必要と考えられる。基礎看護実習Ⅰは、看護学を学びはじめた最初の実習であり、その学習内容・成果はここまで到達すべきという限定的なものではなく、発展的な側面を持つものと考え、できた、できていないという最終結論より、実習目標の達成状況として何ができて、何ができていないのか、さらに次のステップに向けどこに課題が残っているのか学生自身が理解できることが実習評価に求められていると考えられる。

よって本研究では、ICEモデルを用いて、基礎看護実習Ⅰにおける実習目標達成度を学生と教員が共有できるルーブリックを作成することを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

ICEルーブリック作成には柞磨¹⁰⁾、Sue¹¹⁾の文献を参考に、事例による教員間での評価の現状をもとに検討した。本実践の流れを図1に示した。

1. 実習記録の評価

基礎看護実習Ⅰの実習指導を担当した教員のうち7名（研究者5名を含む）は、従来の実習評価表を用いて、3名の同一学生の実習記録を評価した。その後、評価について事例検討を行い、その結果をもとに研究者でルーブリック案を作成した。2019年度の同実習では、研究に参加の同意が得られた教員16名（研究責任者を除いた研究者4名を含む）が学生の実習記録をこのICEルーブリックを用いて試験的に評価した。

2. 実習記録選択条件

事例検討に用いた実習記録は次の条件で選択した。2018年度基礎看護実習Ⅰで用いられた従来の評価表で「生活者としての対象理解に関する評価項目」において、異なる評価レベルの事例であること、今回5段階評価のうち、[1：かなり努力が必要]と[5：大変よくできた]に該当する学生がおらず、[2：少しはできた]、[3：できた]、[4：よくできた]の3つのレベルから選択した。もう一つの選択条件として、事例検討者は実習期間中、実習記録

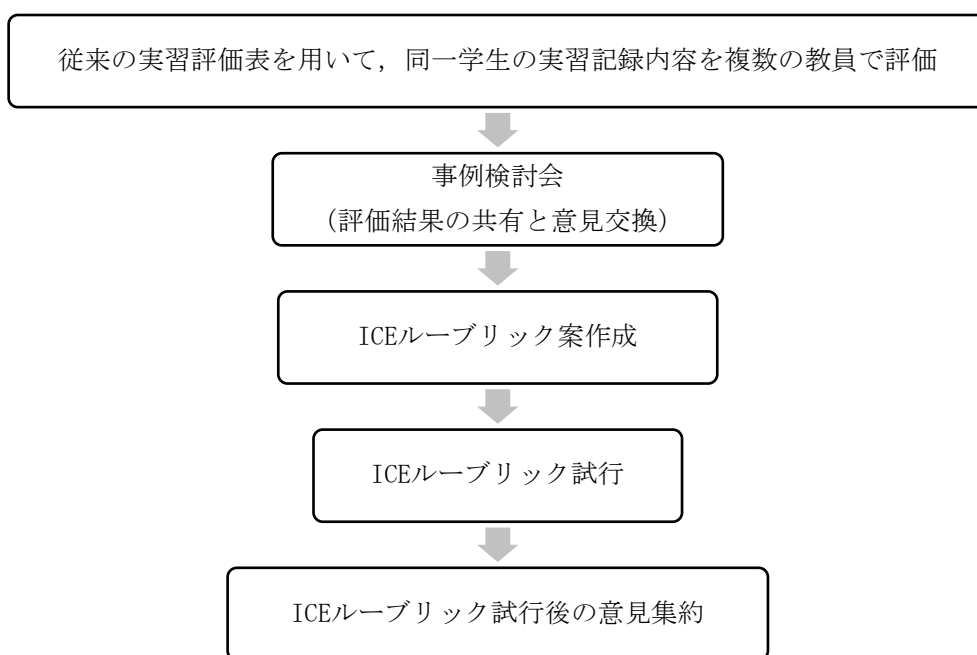


図1 本実践の流れ

の記載者である学生を担当・評価していないことを挙げた。

3. 評価の現状把握

事例検討者は基礎看護学の教員7名であり、各教員が3事例の評価を行った。評価には従来の実習評価表の項目を用い、評価とその評価の根拠を自由記述で記載できる用紙を準備した。評価期間を3週間とし、事例と評価用紙を、配布した封筒に入れ研究責任者に提出するよう依頼した。ここで評価用紙の評価にばらつきがあるかを確認した。その後の事例検討会では、提出された評価用紙を各教員に返却し、各事例でそれぞれの教員がなぜこの評価にしたのか、実習記録用紙（資料1）のどの部分をどのように評価して、到達レベルを判断しているかを確認した。

4. 到達目標の設定と評価の根拠となる要素の抽出

評価の現状を踏まえ、事例検討者で基礎看護実習Ⅰでの到達目標の確認を行った。次に到達目標に達成したと評価できる要素を実習記録内容から抽出することで、評価の根拠とした。そのため、実習記録の記述において不足している内容は対象とはせず、学生の実習記録内容を整理することで評価対象の要素を抽出し根拠とした。

5. ICE ルーブリック案の作成

研究者5名で、事例検討で得られた評価の根拠となる要素をもとに、基礎看護実習Ⅰでの具体的な到達内容を確認し、これがICEモデルでいう、I

(Ideas)・C (connections)・E (Extensions) のどの枠組みに該当するのか検討した。続いて相互の関連を図りながら各枠組みに入れる内容を検討した。さらにICEモデルは発展し続けるものであり、2年次後期に行われる基礎看護実習Ⅱの内容も含め検討した。内容の表現にはICEモデルの各枠組みで用いられる動詞を参考に、さらに学生・教員ともに各項目の内容が理解できるよう表現を考えICEルーブリック案を作成した。

6. ICE ルーブリックの試行および試行後の意見の集約

2019年度の基礎看護実習Ⅰにおいて、実習指導教員16名に協力を依頼し、まず、実習担当学生全員の評価を従来の評価表で評定し、次にその中から担当学生2～3名を目安に、ICEルーブリックでの評価表で評定を求めた。その際、ICEルーブリックの評定は成績には反映しないことを説明した。またICEルーブリックの試行に協力を得られた教員に質問紙を配布した。内容はICEルーブリックが達成目標および主体的な学びをねらいとしたプロセスの共有になっているかと目標設定の妥当性について4段階評価、および回答の理由について自由記述式で回答を求めた。その他、ICEルーブリックの感想・意見を自由記述式で回答を求め、意見を整理した。

7. 倫理的配慮

研究協力を依頼したすべての教員に対して、研究

氏名	A 氏		年齢		④入院生活の環境
診断名			①入院するまでの経過 (現病歴、入院前の生活の様子)		
主訴					
②日常生活の様子(その人の思い・考え方も含む)					
食事	排泄	活動、休息、睡眠	清潔 整容、着衣	コミュニケーション 他者との関わり	⑤環境を整えるために看護師が行っていること
③1日の過ごし方					A氏の生活と生活に対する思い、A氏に行われる看護(まとめ)
入院前 0時 6時 12時 18時 24時 入院後 0時 6時 12時 18時 24時					

基礎看護実習Ⅰ 記録用紙1号

資料1 実習記録用紙

の趣旨を口頭で説明した。研究協力は自由意思を尊重し、事例検討会への参加やICE ルーブリックの試行、質問紙の回収をもって同意とみなした。

事例検討に使用する実習記録は、学生の成績確定後に選定した。実習記録は患者および学生が特定されないよう匿名加工した。対象学生には、口頭で研究の趣旨と実習記録は成績確定後に使用すること、個人情報とは匿名加工すること、研究責任者以外には個人情報を漏らさないことを説明し、同意を得た。

また事例検討に使用した実習記録および対象者の記入した評価表、質問紙は厳重に管理し、結果を論文で公表する際は匿名性を保証することを説明した。

Ⅲ. 結果

1. 教員評価の現状

同じ事例を用いて、従来の評価表での評価を行った結果、各事例、教員間で5段階評価での評価の差が2段階から3段階みられた(表1)。

次に、各事例において、各教員に5段階評価結果の理由、つまり評価基準について確認した。その結果、教員間で「3:できた」が「普通」という規準は一致していたが、その「3」である普通の解釈には次のような意見があった。「1年生のこの時期に、多少の情報不足があるのが普通である。但し、その情報の不足の程度や情報の質(情報の羅列に終わっている、イメージが付きにくい、生活がみえてこない)点で加点までに至っていない」また、「事実には多少の不足があるが、看護の視点にそって書けているか、さらに「4:よくできた」「5:大変よくできた」に相当するプラス要素がないか」で判断していた。その評価の判断の例は表2の通りであった。

さらに、実習記録用紙「A氏の生活と生活に対する思い、A氏に行われる看護」の評価の視点も異なった。「この欄に生活への思いが記述されていなくとも、記録用紙の他の部分で記載されていれば「5」とすることもある」や「この欄で生活がみえてこないことで「3」という結果とした」などこの

欄の評価全体への影響は教員によって異なった。「全体像が上手く書かれて〔5〕とするのか、事実があれば〔5〕なのかで変わる。1年生のレベルでは、後者でいいのではないか。まずは色んな視点から見ることを学ぶ、さらにその生活にどう思っているのかを確認しようというレベルであり、意味付けまでは求めなくてもいいのではないか」などの意見があった。

2. 到達目標の設定および評価の根拠となる要素の抽出

現状を踏まえ、まず基礎看護実習Ⅰの到達目標(SBO)の設定を行った。到達目標は、現在の目標に変更はなく、【看護の対象となる人の生活の場や生活の仕方について説明することができる】で合意された。その検討過程で、この目標には「生活者としての視点で対象となる人を見る」「人間を部分的でなく全体として捉える」ことのねらい含まれることが共有された。

次に評価の根拠となる要素を検討した。実習記録用紙の各記述欄に求める内容、つまり評価の証拠について次の要素が抽出された(表3)。さらに実習記録用紙「A氏の生活と生活に対する思い、A氏に行われる看護」については、まとめとなる部分で

あり、より具体的内容として「入院によってこれまでの生活がどのように変化し、そのことを対象となる人がどのように捉え、そこにどのような看護が行われているか関連付けて説明できる」が挙げられた。この内容に関して、4日間の臨地実習での到達は困難ではないかという意見と人間を部分ではなく統合してみるためには必要であるという意見があった。結果として、ICEルーブリックでは内容は残し、2019年度の従来の評価表では、この記述欄の評価は、別の実習目標「看護の役割・機能を捉える」で評価することにした。

3. ICEルーブリック案の作成

これまでに抽出された評価の根拠となる要素をもとに、I (Ideas)・C (Connections)・E (Extensions)の枠組みの検討を行った。まずは、到達目標における評価の観点を、生活者としての対象理解とし、基礎看護実習Ⅰでの具体的な到達内容を「入院によってこれまでの生活がどのように変化し、そのことを対象となる人がどのように捉え、そこにどのような看護が行われているか関連付けて説明できる」とした。次にそれがICEモデルのどの枠組みに相当するかを検討した。この評価内容は様々な事実を捉えた上で、それをどう解釈(思考)するかであり

表1 事例の評価

事例	教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	教員 E	教員 F	教員 G
No.1	3	3	4	4	4	3	4
No.2	5	5	5	3	5	5	5
No.3	2	4	4	3	3	4	4

[5段階評価] 5: 大変よくできた, 4: よくできた, 3: できた, 2: 少しはできた, 1: かなり努力が必要

表2 評価の判断例

[4: よくできた] とする例
・生活の思いについて、入院前と比較してどうかの視点がある。
・疾患については求めているが、理解し書かれてある部分については加点できる。
・羅列ではなく、きちんと整理して書かれている。
・患者と関わる中で得た本人の思いが書かれている。
[5: 大変よくできた] とする例
・入院前の生活についてよく情報を得ており、それを踏まえて入院生活について考えている。
・看護の視点がもれなく書かれている。情報量の多さ。療養環境においても丁寧に観察し図示や記述できているのは、視点をしっかりもっている証拠である。
・学内での学びを活かして現場をみようとする視点がある。

表3 評価の根拠となる要素

実習記録用紙の②「日常生活の様子（その人の思い・考え方を含む）」
・看護の視点に沿って、様々な視点から確認し、事実を捉えている。
・生活への思い（主観的事実）が書かれており、さらにそれに対する客観的事実を確認している。（事実をカルテからだけでなく、対象の反応からも確認しているか）
実習記録用紙の④「療養環境（ベッド及びその周囲の状況も含む）」
・対象のADLに合わせて（生活行動範囲を含めて）図や文を用い捉えようとしている。（部分だけでなく、全体を捉える）
・安全面に関して、捉えることができています。
実習記録用紙の⑤「環境を整えるために看護師が行っていること」
・「安全」「快適」に触れられている。（「治療の意味」については問わない）
実習記録用紙「A氏の生活と生活に対する思い、A氏に行われる看護」（まとめ）
・実習記録用紙の③「一日の過ごし方」での入院前と入院後の違いから捉えられている。
・入院によってこれまでの生活がどのように変化し、そのことを対象となる人がどのように捉え、そこにどのような看護が行われているか関連付けて説明できる。

Connectionsと判断した。またこのConnectionsがどう発展するかを考え、次の基礎看護実習Ⅱの内容も含め検討した。基礎看護実習Ⅰが基礎看護実習Ⅱの健康に何らかの障害をもつ人の生活を捉えることにつながっていくことを意味づけるためにも基礎看護実習ⅠではConnectionsに留め、基礎看護実習Ⅱの内容をExtensionsに表記した。Connectionsに設定した評価内容については、検討過程で達成困難との意見があったが、学習のプロセスとしてここに示すことは必要であると考え、そのまま残すことにした。

続いて、Connectionsの理解に必要なIdeasを検討した。ここでは様々な視点から人間を捉える、つまり実習記録用紙（資料1）内の②～⑤を捉えることが必要であるため、評価の根拠となる要素（表3）をIdeasに表現した。表現にはICEモデルで用いられる動詞を参考にしつつ、教員・学生がより理解できるような文言を検討した。

さらに、Ideasの一つ一つの評価内容の理解を促すために、事前学習の欄を設けた。

配点については、これまでの評価表では5段階評価で最小1点、最大でも5点での配点に過ぎず、目標におけるこの項目の配点は少ないと考えた。そこでプロセスを重視し、ICEの各項目に少しずつ配点をするのでより達成状況に応じた点数配分ができるのではないかと考え、全体の配点のバランスをもとに設定した。作成されたICEルーブリック案を表4に示した。

4. ICE ルーブリック試行後の評価

ICEルーブリックの試行後、協力を得られた教員16名から評価表の回収とともに、質問紙による回答を得た。従来の評価表と比べ、ICEルーブリックが達成した目標および主体的な学びをねらいとしたプロセスの共有になっているかの問いでは、15名（93.8%）の人が「思う」「どちらかというと思う」と回答していた（図2）。回答の理由や意見を求めた自由記載では、プロセスについて、「従来の評価表よりもプロセスの具体的な共有ができる」、「まずは基本的な知識や態度から実習をしていく中で応用まで気づき、アドバイスを受けて実施し、理解を深めていくというプロセスはわかりやすい」、また学生の立場を想定し、「学生にとっても目標が明確に示されている」、「評価内容が明確になれば科目で求められている基準が何かを知り、学習や実践に関して意欲的に取り組める」、その他「教員も学生と科目で求められているものは何かを共通認識できる」などがあった。

次に今回のICEルーブリックが1年生での到達目標として妥当であるかについては、14名（87.5%）の人が「思う」「どちらかというと思う」と回答していた（図2）。回答の理由や意見を求めた自由記載では、表現の検討として「目標は妥当と思うが、目標の表現の仕方に工夫がある」、「表現としてわかりにくい」、目標レベルについて「応用のレベルをどこにもってくるかについては検討が必要である」、「C項目がE項目でもいいように思う」、「思いや行

表4 ICE ルーブリック案

観点		Ideas（基礎的知識）	Connections（つながり）	Extensions（応用）
生活をつねる（生活者としての対象理解）	事前学習（自己評価のみ）	<input type="checkbox"/> 対象となる人の生活を捉えるための情報を得る手段を説明できる		
		<input type="checkbox"/> 日常生活における看護の視点を理解できる 【実習記録用紙－②, ④, ⑤】		
		<input type="checkbox"/> 療養環境における、安全・快適性・治療的意味を理解できる		
	実践	a. 日常生活の状況について看護の視点に沿って情報を整理できる 【実習記録用紙－②】	入院や病・障害によってこれまでの生活がどのように変化し、そのことを対象となる人がどのように捉え、そこにどのような看護が行われているか関連付け説明できる 【実習記録用紙－⑤, まとめ】	病気をもつ（何らかの健康を障害した）ことによる生活の影響について考えることができる ※この項目は基礎看護実習Ⅱでの目標到達を目指すものである
		b. 日常生活の状況について対象となる人の生活の思いや行動（反応）を観察し、記述できる 【実習記録用紙－②, まとめ】		
		c. 入院前の生活について様々な情報源をもとに観察できる 【実習記録用紙－③】		
		d. 対象となる人の生活範囲を確認し、どのような環境にあるのか、安全・快適性・（治療的意味）について図示あるいは記述できる 【実習記録用紙－④, ⑤】		

【 】内は実習記録用紙（資料1）に対応している

動を観察できるは言語的コミュニケーションが難しい対象ではこの短い実習では到達しにくい」、その他「一年生は疾患については学びが深まっておらず、症状や病態から生活への影響がわかりづらい」などがあった。

その他、ICE ルーブリック導入にあたっての意見や全体的感想として、「従来の評価表では見えな

かったプロセスが明確になってよいのではないか」、
「ICE を用いるからには学生へのフィードバックをしていく必要がある」「指導経験の少ない指導者にとって学生が主体的に学ぶためにはどのような視点で指導をしていけばよいのか客観的モデルであったように感じた」などがあった。

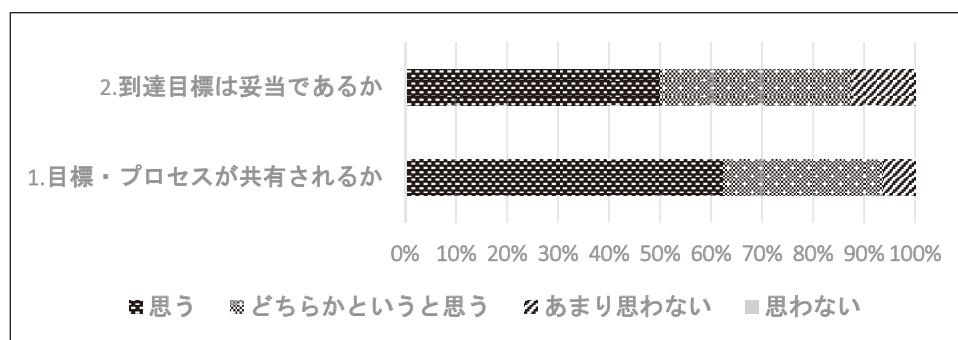


図2 ICE ルーブリック試行後のアンケート結果 (n=16)

Ⅳ. 考察

1. 事例検討の意義

今回、同事例による教員間での評価を行い、評価のばらつき、その背景にある各々の評価基準の捉え方、学生に求めるレベルの違いが明らかとなった。これは従来の5段階評価ではみえてこなかった課題の質の部分に焦点を当てたことで明らかとなった。事例検討では評価の“普通”の解釈は異なったが“普通”を基準とした課題に対する評価の視点も明らかとなった。評価の視点は、その後のループリック作成過程で評価の根拠となる要素に反映され、学生にも何が求められているかをより具体的表現として示すことにつながったと考えられる。

森田¹²⁾はループリック作成にあたり、作成過程そのものが、教員間での到達目標や教育方法を議論する機会となり、評価の一貫性や公平性、平等性の担保に有効と述べている。そしてそのプロセスには丁寧な教員間でのディスカッション・すり合わせが行われることになる。今回の事例検討を通し、評価のズレを教員間で再認識した上で、基礎看護実習Ⅰで生活者としての対象理解を学生にどう学ばせたいのかをすり合わせることができ、ICE ループリック作成過程そのものが教員間で価値観の共有、評価基準の統一につながったと考えられる。

2. ICE ループリックを用いた学習方法と学習成果の共有

ICE モデルを用いたループリックを検討した結果、実習目標に対する達成内容を各レベルで具体的かつ肯定的表現で示すことができ、期待される学習成果の明確化、さらには学習方法の共有にもつながったと考えられる。特に初学者の教育においては、目標達成に至るまでにどのようなスモールステップを踏んでたどり着くのかを教員と学生が共通理解する必要があると考えられる。作成されたICE ループリックは目標および学習プロセスについての共有という点で、教員の試行後の意見から、学習プロセスの共有や理解促進につながった、また学生の立場を考慮した意見として、目標や基準の明確さなどから意欲的に取り組めるなど、多くの支持を得ることができた。目標の妥当性については、教員間で概ね同意をえられたが、Extensions に基礎看護実習Ⅱの内容が提示されることで混乱を与えてしまうことが懸念

された。しかし、基礎看護実習Ⅰでは、まずは看護の対象となる人間を生活者として捉える段階としており、それを踏まえ次のステップである健康に何らかの障害をもつ人を対象にする。学生にとって、基礎看護実習Ⅰの体験が今後の学びにどうつながっていくのか、学びは発展していくものであり、基礎看護実習Ⅰの到達目標は通過点であることを示すことができると思図している。これは他の評価方法にある、これができるばよいという評価基準ではさらに学びを深めようとする学生の学びを制限しかねない。しかしICE モデルでは、学びに終わりではなく、一連の思考のプロセスを辿った後、再びIdeasに戻り、再度問い直しを行うことで学びを深めることができる¹³⁾。学生にこの学びの深まりをイメージできるよう、ICE モデルそのものの理解を促していく必要がある。

ICE モデルの学習方法として、柞磨¹⁴⁾はICE モデルではI・C・Eの各レベルに可逆性があり、Extensionsに先に触れ、興味・関心や探究意欲を高めてから、Ideasの学習を行うことも可能とし、土持¹⁵⁾もICEについて、ステップ(段階)ではなく、フレームワーク(枠組み)であり、必ずしも考えからはじめて、つながり、そして応用にいかなければならないということではないと述べている。教員としては学びのプロセスを示す意味を捉えつつ、一方でフレームとしての考えも必要であると考えられる。実習の場で起こることは応用であり、それを理解するには何が必要かのフレームが必要である。特に基礎看護実習Ⅰでは体験をその場で理解するというより、体験後の意味付けが学生の理解に欠かせない。初学者にとって、この意味付けは、これまでも教員や臨地の指導者の関わりが学生の理解に大きく影響していた。これをICEモデルにすることで得られた情報またIdeas部分の意味付けを主体的にできる(しようする態度が養える)と考えられ、これが前提で教員は学生の理解をサポートする姿勢で関わりことができると考えられる。特に実習はそのものがアクティブ・ラーニングであることから、学生個々がより主体的に学習していけるよう、教員は支援していく必要がある。さらに主体的かつ実習期間での目標達成を促進するには、Ideasの理解が必要であり、それにはそれまで授業等で学習してきた内容とのつながりを意識する必要もある。事前学習として評価表に入れることでより具体的に課題に求められ

ていることを意識して実習に臨むことができると期待される。これらは評価表としてだけでなく、杳磨の述べる学生の成長支援ツールとしての活用が示唆された。

このように ICE ルーブリックを活用することで実習目標達成度を学生と教員が共有できる可能性が示唆されたと考えられる。今後は教員・学生ともに ICE モデルの理解促進、さらに学生との共有に向け、フィードバックを前提とした運用方法を検討する必要があると考えられる。

3. 今後の課題

今回の到達目標に関し、事例検討や ICE ルーブリック試行後の意見からも、短期間での到達が難しいと懸念される箇所があった。これまでの学生の傾向として、短い実習期間で課題である実習記録を埋めることが優先される傾向にあった。初学者であり学習レベルとしてもまずは見聞きしたことを記述することは重要な課題である。しかし知識レベルで終わるのではなく、その知識を統合する視点や様々な課題のつながりを意識するには Connections の存在は重要と考えられる。一方で教員の指導の影響を大いに受ける部分でもあり再評価する必要がある。

小宮山¹⁶⁾ はルーブリックの課題の一つに、ルーブリックに関する教員の理解と学生理解との間、あるいはルーブリックによる評価内容と学生が実習で経験する内容との間の隔たりについて述べている。これは今回の ICE ルーブリックを作成・試行時にも懸念され、教員のアンケート結果からも学生に提示するには文言の変更が必要な箇所がみられた。また教員間でも一部捉え方の曖昧な部分が窺えたことから、表現の検討に加え、実際に学生に提示する際、教員間でも丁寧な説明は必要不可欠と考えられる。しかし、細かな行動レベルでのできた、できなかった、を評価するような文言ではないため、学びの質を捉えた評価にすることで経験内容と評価の内容の隔たりは回避できると考えられる。

V. 本研究の限界

本研究では、従来の評価表の課題を把握し、ICE ルーブリック案の作成に焦点を当てたため作成過程の報告、教員による ICE ルーブリック案の試行に留まった。作成された ICE ルーブリック案と従来

の評価表は評価の条件が異なるため今回の ICE ルーブリックでは評価の個人差を測定していない。今後は作成した ICE ルーブリック案を用いて、実習目標達成度を適切に評価・共有できる評価表の作成に向けて検討していく必要がある。

VI. 結語

今回、基礎看護実習 I の生活者としての対象理解に焦点をあて、実習目標達成度を学生と教員が共有できることを目指し ICE モデルを用いたルーブリック作成を試みた。

ルーブリック作成過程における前段階としての事例検討では、これまでの 5 段階評価において、教員間の評価の差、その背景にある評価基準の捉え方の違いが明らかとなった。事例検討を通して抽出された評価の根拠となる要素をもとに ICE モデルの枠組みの内容を検討し、ICE ルーブリック案を作成した。

作成された ICE ルーブリックによって、実習目標に対する達成内容を各レベルで具体的かつ肯定的表現で示すことができ、期待される学習成果の明確化、さらには学習方法の共有が示唆された。さらに学生の主体的学習の促進にも期待された。

今後の課題には、ICE ルーブリックの内容に関し、より学生が理解できるような表現の工夫の必要性が指摘された。今後は学生の評価も踏まえ、ICE ルーブリックが効果的な学習ツールとなるよう改良を重ね、またフィードバックを前提とした運用方法も検討していくことの必要性など示唆を得ることができた。

最後に、今回の事例検討から ICE ルーブリック作成過程そのものが、教員間で価値観の共有、評価基準の統一につながったことに大きな意義があったと考えられる。

謝辞

本研究にあたり、事例検討会に参加して頂いた藤野みつ子教授、恒松佳代子准教授に感謝いたします。また ICE ルーブリックの試行にご協力頂いた実習指導教員のみなさまに感謝いたします。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

文献

- 1) 文部科学省：新たな未来を築くための大学教育の質的変換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）. 2012, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chokyo0/toushin/1325047.htm (2020.8.17閲覧)
- 2) 小宮山陽子, 青木雅子, 櫻田章子, 他：看護基礎教育におけるルーブリックの推移と課題に関する文献調査. 東京女医大看会誌, 14：15-22, 2019.
- 3) 森田敏子, 上田伊佐子：ルーブリックとは何か. 看護教育に活かすルーブリック評価実践ガイド, メヂカルフレンド社, pp10-14, 2019.
- 4) 土持ゲーリー法一：ICE ルーブリック―批判的思考力を伸ばす新たな評価方法―. 主体的学び, 創刊号：32-60, 2014.
- 5) 柞磨昭孝：ICE モデルを軸とした主体的な学びの実践―アクティブ・ラーニングの導入と展開―. 主体的学び, 4：70-89, 2016.
- 6) 柞磨昭孝：ICE モデル. ICE モデルで拓く主体的な学び, 東信堂, pp3-9, 2017.
- 7) 前掲書 6) pp11-12.
- 8) 前掲書 6) pp39-40.
- 9) Sue Fostaty Young・Robert J.Wilson：ICE を教育と学びに応用するには. 土持ゲーリー法一監訳, 小野恵子訳, 「主体的学び」につなげる評価と学習方法, 東信堂, pp15-82, 2017.
- 10) 前掲書 6) pp73-80.
- 11) 前掲書 9) pp42-78.
- 12) 森田敏子：複数の教員で作成するルーブリック. 看護展望, 10：78-85, 2017.
- 13) 前掲書 6) pp43-47.
- 14) 前掲書 5) pp79-80.
- 15) 前掲書 4) pp43.
- 16) 前掲書 2) pp20.

(令和3年1月5日受理)

Examination of rubrics using ICE model in 1st year basic nursing practice

Junko IWAMURA, Kanako INOUE, Hiroko IWASE, Ikuko TOKUNAGA, Hiromi ARAO

Abstract

This study aimed to create a rubric that would allow students and teachers to share the degree of achievement with regard to practical training goals by using the ICE model.

As part of the rubric creation process, we first focused on understanding the object based on the living background of the client and then evaluated the contents of the training records of three students who had acquired credits by multiple teachers using a conventional evaluation table. Next, the evaluation results were shared, and opinions were exchanged at a case study meeting. At this case study meeting, the differences, in terms of evaluation, between faculty members in the five-grade evaluation thus far and the differences in how to grasp the evaluation criteria underlying it were clarified. Based on the current situation, we reset the goals for Basic Nursing Practice I. In addition, the elements that formed the basis of the evaluation were extracted. Based on this, the framework of I (Ideas) , C (Connections) , and E (Extensions) was examined, and a rubric was proposed. Next, the conventional evaluation criteria and the created rubric were used for evaluating several students per faculty member. From the opinions, which were noted after the rubric trial, expectations regarding the goals and learning process could be shared with the students, and the examination of expressions was also clarified.